

東北の被災地、13年間の変遷

東日本大震災の被災地を撮り続けるカメラマン三浦寛行さん(55)＝岐阜市鷺山南＝の写真展が3月29日まで、同市神田町の岐阜信用金庫本店ロビーで開かれている。1年ごとにパネルにまとめ、13年間の変遷を伝えている。最新は2023年12月末～24年1月初旬に訪れた福島、岩手県の写真。能登半島地震の被災地がこれから歩む道のりを重ねながら、三浦さんは「復興の完成形とは何か」を問いかける。

(田代理加)



岐阜市の三浦さん写真展

写真展を「この地域の人に防災意識を高めてもらう機会にした」と語る三浦寛行さん。岐阜市神田町、岐阜信用金庫本店

三浦さんが最初に被災地を訪れたのは、震災3カ月後の2011年6月。以降、年に数回ペースで訪ねてはカメラで記録し

「復興の完成形」問う

最近に変化なし 住民戻らず、盛り土むき出し



防災士としても活動しており、会場には防災グッズ展示コーナーも設けた。同

てきた。写真展では1年ごとに6枚ずつ厳選。1年1パネルで、14パネルに84枚の写真が展示されている。

最新「13年目」のパネルに、岩手県陸前高田市の沿岸部を写した一枚がある。もともと市街地だったエリアだが、かさ上げ工事が完了した今も茶色い土がむき出しのまま。写真で同所の変遷をさかのぼると、震災3年目の頃には巨大なベルトコンベヤーで土を運ぶ工事の様子を「希望のかけ橋」と題して紹介。活気のある未来を感じさせる。ところが、ここ数年は風景にあまり変化がない。「盛り土をしても住民は帰って来ず、土地

の使い道がない。復興のゴールはどこなのか」。カメラを向けながら自問を繰り返したという。

別の一枚は福島県双葉町。避難指示が解除され、居住可能な「特定復興再生拠点区域」となっているが、人の気配はない。ハード面を整えても人々の生活は戻らない現状に、三浦さんは「能登も同じ道を歩むのだろうか」とぼつり。さらに「もし岐阜で大地震が起こったら復興にどれだけ時間がかかるか、時系列を追いつながり想像してみてもいい」と言葉を続けた。

防災士としても活動しており、被災地を訪れる際は常に車中泊。さまざまな防災グッズを活用している。毎年この時期に写真展を開催しているが、今年は能登半島地震も踏まえ「人ごととして写真を見るのではなく、防災意識を高める機会にしてほしい」と、会場に防災用品の展示コーナーも設けた。5年保存の飲料水ペットボトル、ビニール製給水袋、簡易トイレセット。「今どれも品薄状態。いざ起こってからでは手に入らない」と、事前の備えの大切さを訴える。2月末には石川県内の避難所調査に行く予定で、「防災士、写真家として災害を記録し後世に伝えることで、防災啓発をしていきたい」と話している。